



センコーグループホールディングス 株式会社
代表取締役社長
福田 泰久 氏

LOGGB 20周年

特別トップ対談

株式会社ダイフク
代表取締役社長
下代 博 氏



トラック輸送や物流センターなど物流現場での人材不足が深刻化しています。IoTやAIなど先端技術を活用した物流システムが開発され、物流現場の生産性向上に向けた取り組みが進んでいます。

情報武装に積極的なセンコーグループホールディングスの福田泰久社長と、マテハン業界をリードするダイフクの下代博社長に、物流業界が直面する課題とその対応策を語っていただきました。

人手不足はモーダルシフト、 ロボット化で **福田社長**

——物流業界では人手不足が深刻化しています。その対応として働き方改革が政府の重要施策としても進められています。物流企業としての取り組みについてお聞かせください。

福田 確かに人手不足の対応が大変重要な経営課題になってきています。とくに若い人がなかなか物流業界に入ってきません。トラックでは長距離輸送が1泊2日などと拘束時間が長くなるため敬遠される傾向があります。対応策の一つとして、鉄道や船舶を利用するモーダルシフトを推進しています。物流センターではロボット化を進めています。重いものや反復する作業など人が敬遠しがちな仕事をできるだけ機械化しています。事務部門もできることからAIを導入しています。また、仕事のシェアリングにも取り組み、

早朝や夜中の仕事、あるいは日中でも時間をきめて担当してもらいます。そうすることで高齢者も働きやすくなります。職場での託児所も10年以上前から設けており、全国で6カ所になりました。パートさんが約12,000人いますが、子供と一緒に仕事に来てください、と言えますので採用にも役立っています。女性が働きやすい環境づくりも大切です。細かいことですが、トイレをもっと女性が使いやすいものにするとか。

一方、外国人の受け入れという方法もありますが、これはなかなか進んでいないのが現状です。技能実習生や留学生などの一時的な受け入れはありますが、早晚本格的な対応を考えないとやっていけないのではと心配しています。社内の技能コンテストに、ここ4～5年は、外国人ドライバーも参加しており、技能

機械でできることは機械で、 人は人でしかできない仕事を **下代社長**

では優れた結果を出していますが、筆記試験は難しいようです。

下代 お客様の人手不足の解消策として省人化、省力化システムを提案させて頂いていますが、我われ自身の課題としても取り組んでいます。工場での、自動化はある程度できているのですが、据え付け現場の機械化・自動化が難しいというのが現状です。このため、従来は部品・部材を現場に搬入してから組み上げていたものを、できるだけ工場ですべて組み立ててから出荷し、現場での据え付けに時間がかからないようにしています。

当社が手掛けるマテハン事業は、もともと、お客様企業に対して「重労働や単純反復作業から人を解放する」、つまり機械でできることは機械がやり、人は人

でしかできない仕事をやっていただくことを理念として続けてきました。自動車工場のコンベヤシステムで日本のモータリゼーションの幕開けに寄与して以来、さまざまな製造業の自動化に携わりながら、1990年代には流通・小売業界で物流センターの自動化ニーズが拡大し、ソーターなどの物流システムを数多く納入しました。昨今では、ネット通販分野で引き合いが急激に増加しています。ネット通販では、以前は消費者が買い物かごを持って店舗で購入していたのに代わり、物流センターの作業者が、注文に応じてすぐに商品を取り揃え、梱包、出荷までを行い、場合によっては当日のうちに配送します。労働人口が減っていく中で逆に人手を多く必要とする、こうした変化に対応するには、今まで以上に自動化レベルを高め、将来、究極的には「無人化」を目指す必要があります。その実現の